

〔共同研究：長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー・グローバル・ヒストリーの視点から〕

長崎の教会群—その歴史的背景とツーリズム

橋 内 武

- I. はじめに
- II. 長崎の教会群—その地理的・歴史的背景
 - 1. 長崎県の地理的環境—半島部と島嶼部
 - 2. 国際貿易港—横瀬浦・口ノ津・福江島・平戸・長崎・対馬
 - 3. 長崎のカトリック—宣教・追放・潜伏・復活
- III. 長崎県のカトリック教会—地理的分布と教会建築史
 - 1. 長崎大司教区と五島の教会
 - 2. 長崎の教会建築史
- IV. フランス人宣教師
 - 1. ド・ロ神父
 - 2. マルマン神父
 - 3. ベルー神父
 - 4. フレノー神父
 - 5. ラゲ神父, ガルニエ神父
- V. 日本人の棟梁建築家・鉄川与助
 - 1. 鉄川与助の生い立ち
 - 2. 鉄川与助の教会建築
 - 3. 晩年の鉄川与助
- VI. 西洋の教会建築と日本の伝統工法・技法の融合
 - 1. 大浦天主堂
 - 2. 旧五輪教会
 - 3. 江袋教会堂
 - 4. 出津教会堂・大野教会堂
 - 5. 旧野首教会堂・江上天主堂など
- VII. 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産化
 - 1. 世界遺産としての価値
 - 2. 世界遺産の構成資産
 - 3. 聖地巡礼
 - 4. 世界遺産化への歩み
- VIII. 世界遺産化とツーリズムの諸問題
 - 1. 場所の商品化一点から面へ

2. 五島巡礼
 3. 世界遺産化に向けての問題点と改善策
 4. 関係三者の役割—ゲスト・ホスト・プロデューサー
- IX. まとめと結論

I. は じ め に

11共同研究215「長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー—グローバル・ヒストリーの視点から—」は、08共同研究193「日本と東アジアのコミュニケーションの総合的研究」(遠山 2011)をほぼ継承したプロジェクトである。^{*} この二つの共同研究によるフィールド・ワークを通して、筆者たちは長崎県の長崎・平戸・佐世保(黒島)・外海・五島・島原と熊本県天草を探訪し、それらの教会群とキリスト教関連遺産をつぶさに見学・観察した。このような広範な現地調査と関連文献の渉猟により、小論は主に五島列島に焦点を当てて、その教会群の歴史的背景とツーリズムをめぐる諸問題を活写する。構成は前掲のとおりである。

II. 長崎の教会群—その地理的・歴史的背景

1. 長崎県の地理的環境—半島部と島嶼部

まず、長崎県の地理的環境は、九州の最西端に位置し、東シナ海に面している。西彼杵半島や島原半島を含む半島部と平戸島・五島列島を含む島嶼部からなり、その多くはリアス式海岸を形成している。県内には風光明媚な地域が多く、その一部は雲仙天草国立公園・西海国立公園(五島列島を含む)と壱岐対馬国定公園に指定されている。海上保安庁の『海上保安の現況』によれば、日本にある6,852島のうち、971島が長崎県にある。長崎県は言わば「島国の中の島国」である。そのうち、平成17年度国勢調査で人口が確認された法定有人島は54で、都道府県の中で一番多い。下五島の五島市にある、蔵小島は面積0.03 km²、周囲1.8 kmであり、全国一小さな法定有人島である。県の最南端は福江島南西約70 kmにある男女群島だが、無人島である。法定有人島に限定すれば、福江島の大瀬崎が九州の最西端になる。

2013年6月現在における長崎県の人口は、1,382,864人である。第1の都市は県庁所在地の長崎市であり、人口432,826人、人口密度は1,067人/km²である。第2の都市は佐世保市で人口254,309人、人口密度は597人/km²である。この二つは地方中枢拠点都市である。

^{*}両プロジェクトに参加したのは、遠山 淳・橋内 武・三宅 亨・野原康弘・金本伊津子と柳本麻美であるが、11共同研究「長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー—グローバル・ヒストリーの視点から—」には青野正明・軽部恵子も加わった。平岡隆二氏(調査当時・長崎歴史文化博物館主任研究員)、中村真由美氏(調査当時・五島観光歴史資料館学芸員)、高橋弘一氏(新上五島町文化財課主査)の3氏からは、調査地域の専門家として種々の助言をいただいた。なお、筆者(橋内)は2013年9月に長崎市内と外海地区、2014年7月に新上五島町と五島市、2014年8月に小値賀町・新上五島町・五島市を独自に探訪し、カトリックの教会群などを拝観・見学した。本稿を執筆するに当たっては、末尾の参考文献、調査地で得た情報、そして池田健二氏の講座「五島列島カトリック教会探訪」(2015年4月10日、朝日カルチャーセンター中之島教室)が参考になった。記して謝意を表したい。

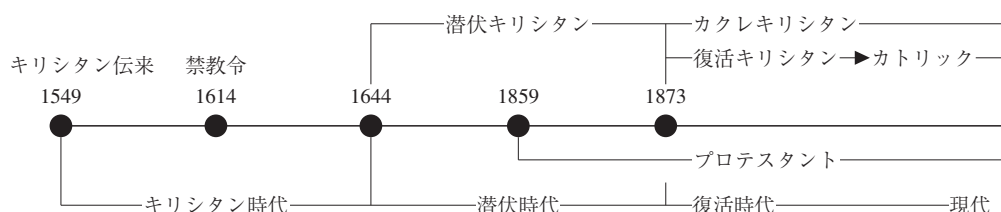
本土から約100kmの海上に浮かぶ五島列島は中通島・若松島・奈留島・久賀島・福江島の五島で代表されるが、140余りの島々からなる。最北端の宇久島は佐世保市に属す。北松浦郡小値賀町の島々には2,575人が住み、人口密度は101人/km²、中通島とその属島からなる南松浦郡新上五島町の人口は20,008人、人口密度は94人/km²、福江島・久賀島・奈留島などからなる五島市の人口は37,735人、人口密度は90人/km²にすぎない。こうしてみると、五島の総人口は6万人余りであり、長崎県の中でも著しく人口希薄な過疎地である。増田・日本創成会議（2014）によれば、20歳から39歳までの女性人口（人口再生産力）から推計すると、2040年に五島市は消滅の可能性がある。より深刻なのは、新上五島町とその北にある小値賀町であって、このまま人口再生産力が推移すれば、2040年に消滅する可能性が高い。

2. 国際貿易港—横瀬浦・口ノ津・福江島・平戸・長崎・対馬

前節で述べた長崎の半島や島々には自然の良港が83もあり、古来より対外交流の拠点になっていた。例えば、16世紀半ばの室町時代後半から安土桃山時代にかけて、まずは西彼杵半島の横瀬浦が、次いで島原半島の口ノ津が、国際貿易港として繁栄した。島嶼部にも国際交流の窓口があった。奈良・平安時代に遣唐使船は福江島の三井楽から東シナ海を渡って、中国の沿岸を目指した。王直などの倭寇が根拠地としたのも、福江島を含む五島列島と平戸であった。平戸は、遣唐使船の寄港地であり、戦国時代には中国との私貿易や南蛮貿易で栄えた港だが、17世紀にはオランダ商館と英国商館が設置され、日蘭・日英間の通商が行われた。だが、英国商館は早くも1623年（元和9年）に閉鎖された。南蛮船は追放される一方で、オランダ商館は幕府の「鎖国」「海禁」政策により、1641年（寛永18年）長崎の出島に移ったのである。なお、中世以来、対馬が朝鮮半島と日本列島の交流（例えば、秀吉の朝鮮出兵、朝鮮通信使）を仲介してきた事実も付け加えておかなければなるまい。

3. 長崎のカトリック—宣教・追放・潜伏・復活

ところで、長崎のキリスト教（カトリック）は16世紀以来どのような歴史を刻んできたのだろうか。図1にあるように、キリシタンの時代は宣教と追放の時代を含む。その後潜伏時代に入り、幕末に復活するのである。プロテスタントはそのような歴史を踏むことなく、幕末から宣教を始めたのである。ここでは、五島を含む長崎のカトリックに限定する。



<図1 日本キリスト教略史>（出典：宮崎 2001：19）

A. 宣教の時代

カトリックは中国や朝鮮と同様、古くは天主教と称した。その宣教は1549年に来日したフランシスコ・ザビエル（イエズス会士）により1550年（天文19年）に平戸で始まり、次いでアルメイダなどにより横瀬浦・島原・口ノ津・五島・天草・長崎各地に広がった。大村純忠・大友宗麟・有馬晴信ら九州諸藩の大名が受洗したことで、布教の勢いが増すことになる。

宣教のみならず貿易の上でも、平戸や長崎は重要な働きをした。一方で、御朱印船は、長崎と鹿児島から出港したが、南洋日本人町の形成に寄与した。また、壱岐・生月・平戸・五島（有川など）には捕鯨基地があり、特に生月の益富組は日本で最大規模を誇った。

B. 殉教の時代

ところが、キリシタンは1587年（天正15年）の豊臣秀吉による禁教令、1597年（慶長元年）の西坂での二十六聖人殉教、1612年（慶長17年）の江戸幕府直轄領への禁教令、1614年（慶長19年）の伴天連追放令、1637年（寛永14年）から翌年にかけての島原天草一揆（つまり、キリシタン禁制への抵抗と領主苛政への批判）を経て、徹底的に弾圧され、多数の殉教者が出た。元和の大殉教の他、大村・雲仙での殉教や浦上一番崩れ・五島崩れなども合わせて想起したい¹⁾。松田（1980）によれば、殉教者総数は約4千人に上ったという。

C. 潜伏の時代

「鎖国」「海禁」の時代（1630年代～1853年）には出入国が禁じられ、長崎出島での貿易は対中国と対オランダに限られ、そこが蘭学の窓口となった。その一方で、各地の潜伏キリシタンは独自の信仰を持ち続けた。生月島や外海や天草は勿論のこと、大村藩の外海地方から五島へ逃れた潜伏キリシタンは、人目につかぬ浜で網を打ち、山の斜面を開墾し、伴天連（神父）も天主堂もない環境の中でキリシタン信仰を続けた。定期的（大抵は正月）に聖画像の絵踏みを迫られる中、仏教徒を装いながら、ロザリオを手にしてオラショ（祈り）を唱え、マリア観音（または納戸神）を拝み、仏事のあとには経消しまでして、その信仰を密かに堅持した。彼らはいかに貧しくとも、帰るべき永福のパライソを信じ続けたのである²⁾。

D. 復活の時代—復活キリシタンとカクレキリシタン

幕末に至り、1859年（安政6年）には安政の修好通商条約（1858年締結）によって長崎が自由貿易港となった。今から150年前の1865年（元治2年）2月にはパリ外国宣教会から遣わされたプチジャン（Bernard-Thadée Petitjean）神父（1829～1884）らによって、外国人居留地にゴシック風の旧大浦天主堂が献堂された。翌月の3月17日には250年の弾圧を経た15名の浦上キリシタンが、この「フランス寺」を訪ね、信仰を表明した。これは驚くべき「信

1) キリシタンの通史は高橋（2013）を、その殉教史は片岡（2010）を、島原天草一揆は大橋（2008）を参照。「五島崩れ」は1868年（明治元年）久賀島で最初に起きた。これは五島藩による迫害であり、信徒200余名が6坪（12畳）ほどの牢屋（牢屋の窄）に押し込められた。8か月後にリーダー以外は解放されたが、39名が牢内で亡くなった。その史実を記念して殉教碑と教会堂が建てられた。

2) 潜伏キリシタンについては大橋（2014）と五野井（2014）を、経消しについては、宮崎（2001）とToyama（2014）を参照。五島のキリシタン史（特に明治初期の大弾圧）については、浦川（1973）と久賀島近代キリスト教墓碑調査団編（2007）が史料価値がある。



＜写真1 大浦天主堂＞（2013年9月 橋内撮影）

徒発見」の報としてパチカンに伝えられた。だが、弾圧はまだ続いた。浦上四番崩れ（1867年～1873年）と称される迫害の後、米欧派遣特命全権大使岩倉具視一行が諸外国で受けた非難と圧力によって、ようやく1873年（明治6年）にキリシタン禁制の高札が撤廃された。明治政府はキリシタンへの規制を残しつつも、キリスト教を次第に黙認するようになった。

その結果、潜伏キリシタンには3つの選択肢が生まれた。一つは晴れてカトリック教会の信者に復帰すること、2つ目はカクレキリシタンとして先祖伝来の土俗化されたキリシタン信仰を密かに持ち続けることであった。前者を選んだ復活キリシタンは、貧しい中から建設資金を貯め、なけなしの蓄財を叩き、自ら労働奉仕を買って出て、天主堂（カトリック教会）を建設したのである。黒島教会、青砂ヶ浦教会、頭ヶ島教会などには、そのような先祖たちの献身的逸話が伝わっているのである。それらの教会を設計・施工したのは、後述するプチジャン神父、ド・ロ神父、フレノー神父、ペルー神父、マルマン神父などのフランス人司祭や日本人棟梁の野原与吉や鉄川与助などであった。

後者を選んだカクレキリシタンは、カトリックに復帰することなく、キリシタンの民間信仰を続けた。だが、2010年代の現在では継承・リードすべき秘密組織（帳方・水方・触方）の崩壊により、ほぼ途絶えてしまったと言ってもよい。わずかに残った組織にしても、行事の削減・お供え料理の簡素化・オラショの簡素化が進んでいるという。例えば、生月島（根獅子）・外海（黒崎）・五島（旧奈留町、旧若松町、旧福江市）には1990年代まではカクレキリシタンの組織と習俗が確かに認められたのである³⁾。もっとも、地域の神仏信仰に身を寄せ

3) カクレキリシタンについては、片岡（1967）と宮崎（2001, 2014）などを参照。

るという第3の生き方もあり得た。この集団にはカクレキリシタンからの移行も含まれる。

E. 日欧交流の要としての長崎

以上のように、長崎県は遣唐使から始まり、倭寇・南蛮貿易・キリスト教の布教・出島での通商・開港後の近代化・産業化など、様々な点でグローバル・ヒストリーの要であった。海外の異文化に開かれた「四つの口」の一つが長崎であったのである。

長崎のカトリック教会は、宣教（布教）の時代・追放（殉教）の時代・潜伏の時代・復活の時代という変遷を経て今日に至っている点で、プロテスタントとは異なる独自の歴史性がある。宣教の時代にはスペイン・ポルトガルから来た宣教師（イエズス会）が、復活の時代にはフランス人宣教師（パリ外国宣教会）が活躍し、日欧交流に貢献したのである。潜伏の時代には切支丹伴天連は追放されたが、一方で長崎の出島は蘭学の窓口になり、西洋の医学や科学技術がもたらされた。

1859年（安政6年）の開港後、長崎には外国人居留地が造成され、来崎した実業人（例えば、トーマス・グラバー（Thomas B. Glover）、フレデリック・リンガー（Frederick Ringer）、ウィリアム・オルト（William Alt）やウォーカー兄弟（Wilson N. Walker & Robert N. Walker）によって近代化・産業化の礎が作られた。その一方で後述Ⅳのフランス人宣教師などによって改めてキリスト教の布教が行われ、教会が建てられたのである。このように海に開かれた長崎は、千年にわたって異文化交流の核的な場所であり続けたのである。

Ⅲ. 長崎県のカトリック教会—地理的分布と教会建築史

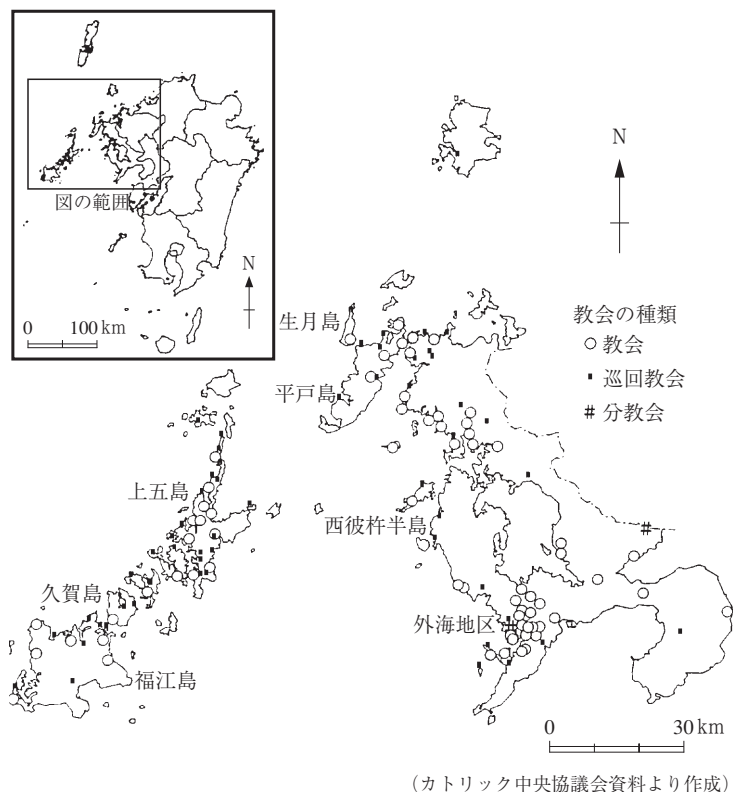
1. 長崎大司教区と五島の教会

長崎は信者数・教会数の多い点で、日本のカトリックの一大拠点である。カトリックでは、47都道府県を16の教区に分けているが、長崎県だけで一つの大司教区をなす。『カトリック教会現勢2013年』によれば、その信者数（受洗者数）は2013年12月現在東京大司教区の96,465人に次いで多く、61,262人を数え、人口の4.29%がカトリックの信者である。カトリック信者率の全国平均が0.34%であることから鑑みると、長崎のカトリック信者の割合がいかに高いかが分かるだろう。教会数の上でも長崎大司教区は最多であり、134を数える。この大司教区の場合、小教区数（71）に比して小規模の巡回教会数（60）が多いことが特徴的である⁴⁾。というのも、禁教が解かれた後、本土から隔絶された離島や農山村のキリシタン集落に教会堂が次々に建てられたからである。

長崎県の中でも教会堂の地理的分布が特に密なのが、（宇久を除く）五島である。『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』によれば、上五島地区と下五島地区を含む五島には合わせて50の教会がある。川上（2010）によると、上五島地区（213.93 km²）には7 km²に1教会、下五島地区（420.77 km²）には21 km²に1教会があるという。上五島地区では、30の教会の

4) 「巡回教会とは、小教区に属し、常設の聖堂をもっていて、定期的に司祭が巡回してくる教会を指します。」—『カトリック教会現勢2013年』（カトリック中央協議会）

うち19が巡回教会である。例えば、米山教会・江袋教会・赤波江教会・小値賀教会は、中知教会（主任教会）の巡回教会であり、船隠教会・佐野原教会・頭ヶ島教会は鯛ノ浦教会（主任教会）の巡回教会である。下五島地区には、20の教会があり、そのうち13が巡回教会だ。例えば、久賀島の五輪教会堂と牢屋の窄殉教記念教会堂は、浜脇教会（主任教会）の巡回教会である。なお、教会建築史上は価値があるが、上五島地区にある野崎島の旧野首教会（写真3）と下五島地区にある久賀島の旧五輪教会（写真6）は、狭義の教会数に入れていない。



<図2 長崎県におけるカトリック教会の分布（2004年），出典：松井（2013：40）>

2. 長崎の教会建築史

では、明治時代以降、長崎と天草の集落のどこにどのようなカトリック教会が建てられただろうか。三沢博昭・川上秀人（2007：154～207）は、長崎の教会群の写真と解説からなるが、その中で建築学者の川上は長崎の教会建築史を5期に分けている。

第1期 準備期—1877年（明治10年）から1895年（明治28年）まで

第2期 展開期—1896年（明治29年）から1909年（明治42年）まで

第3期 完成期—1910年（明治43年）から1920年（大正9年）まで

第4期 停滞期—1921年（大正10年）から1931年（昭和6年）まで

第5期 多様化の時代—1932年（昭和7年）以降

1873年に禁教令が解かれたあとの初期教会堂建築は、単層屋根構成からなる。主廊幅（N）と側廊幅（I）の比（ N/I ）が1.6前後である。この期には35棟の教会堂が建てられたが、ほとんどが木造であり、旧大明寺教会堂（旧称「伊王島教会」、明治村に移築）、江袋教会堂（焼損復旧）、旧五輪教会堂（旧浜脇教会堂を移築）、立谷教会堂（台風で倒壊、廃堂）が代表例である。煉瓦造りは旧大浦・出津・旧馬込・旧井持浦の4教会堂に限られる。これらは、旧大浦天主堂（完成された形態）を例外として、その後の教会堂建築の原初形態を留めている。主廊部はリブ・ヴォールト天井（こうもり天井ともいう）で構成され、列柱は露出した貫（胴差）で固められている、小規模の教会堂である。なお、主廊部とは、一般に身廊部と称される、教会堂中央部の空間を指す。側廊とは身廊の左右にある通路のことである。

その後、展開期と完成期には、① N/I の比が約2.0になり、②貫は主廊部壁体内に隠れるようになる。1910年（明治43年）の青砂ヶ浦教会堂と今村教会堂をもって建築様式として教会堂が完成されたと考えられている。

主に構造建材の観点から教会堂建築史を分けると、次の4段階に分けられる（雑賀 2004）。

1. 明治初期の完成度の高い、煉瓦造り教会（旧大浦天主堂）と民家風の木造教会（旧五輪教会、江袋教会など）
2. 明治中期から後期にかけてのフランス人宣教師設計の煉瓦造り教会（堂崎教会、黒島教会など）
3. 明治後期から大正期にかけての鉄川与助を代表とする煉瓦造り教会の円熟期（青砂ヶ浦教会、田平教会など）
4. 昭和以降における鉄筋コンクリート造りの教会（平戸教会、紐差教会、大江教会など）

ここで2つ注記が必要である。①石造り教会（ド・ロ神父設計・施工の大野教会堂、鉄川与助設計・施工の頭ヶ島教会）は例外的なものである。②昭和期に入って煉瓦造りの教会堂が造られなくなったのは、1923年（大正12年）に起きた関東大震災で煉瓦造り構造の脆弱さが露呈したからである。

川上は内部構成の変遷に沿って、長崎の教会建築史を6段階に分けている。第1群は江袋教会・旧五輪教会、第2群は旧大明寺教会、第3群は旧鯛ノ浦教会・旧野首教会、第4群は堂崎教会・崎津教会、第5群は下神崎教会・大曾教会、第6群は黒島教会・今村教会・田平教会である。この中で、第1群はもっとも簡素で、会堂内部の列柱頂部が露出した貫で連結されていて、どのアーチもこの貫の位置を起点にしている。第2群には列柱間に2連結のアーチがある。第3群ではすべてのアーチが同じ柱頭を起点としている。第4群では列柱の上方と下方に柱頭を設けている。主廊の天井が高くなり、屋根構成も重層化しつつある。第5群では、重層屋根であり、アーケードと壁付アーチで挟まれる壁面に水平の飾りが付く。第6群では三層構成となり、アーケード・トリフォリウム・クリアストリー（高窓）がある完成された教会堂形態をとる。要するに、長崎の教会群は、平面的な単層屋根から重層屋根へ、そしてより高い三層構成へと進化したのである。なお、共同研究者の遠山淳や筆者が観察し

た限り、多くの教会堂は祭壇が東向きでなく、ファサードが海側に面して建っている。

Ⅳ. フランス人宣教師

以上のような長崎の教会建築史の中で注目すべきは、教会建築に造詣の深いフランス人宣教師と優れた日本人棟梁の存在であり、両者間の交流である。長崎のカトリック教会の多くは、パリ外国宣教会から遣わされた宣教師の設計・施工で始まった建築物である。その第1号が「フランス寺」と称された長崎の旧大浦天主堂である。以下、川上（2007）や長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修（2005）などの文献の他に、現地調査で得た知見で補う。

1. ド・ロ神父

ド・ロ神父（Marc-Marie de Rotz, 1840～1914）は、北フランスのバイユーの生まれで、1868年（明治元年）にプチジャン神父とともに来日し、1914年（大正3年）に長崎の大浦天主堂大司教館で亡くなるまで、印刷・医療・土木・建築・授産・開墾・移住などの多方面にも貢献した。その事業は、自らが分割贈与された遺産からなる私財を悉く投入したものであった。特に外海では「ド・ロさま」と呼ばれるほど親しまれ、尊敬される存在であった。建築に限れば、横浜の聖モール会修道院から始まり、長崎・大浦天主堂脇の羅典神学校、外海の出津教会堂・出津救助院（授産施設）・出津鰯網工場（現在のド・ロ神父記念館）・大野教会堂・黒崎教会堂（設計のみ）に加えて長崎の大浦大司教館（設計のみ）がある。これらの建築には、極力現地で建築材料を入手したが、ド・ロ神父は単純な形式を尊び、繰り返しと相称性を重んじた。出津教会堂は、大浦天主堂同様煉瓦の壁をモルタルで覆っているため、煉



＜写真2 出津教会堂＞（2013年9月 橋内撮影）

瓦造りには見えない。「ド・ロ様壁」と称される厚い堅牢な壁は、外海地方にいまなお健在である。そして、鉄川与助に会おうのは、その晩年のことであつた⁵⁾。

2. マルマン神父

マルマン (Joseph Ferdinand Marmand, 1849～1912) 神父は、1876年 (明治9年) 来日。1888年 (明治21年) まで下五島地区で司祭を務めた。その後、伊王島 (長崎市) と黒島 (佐世保市) で司牧した。その間に、旧馬込教会堂を設計したが、これは「白亜の漆喰造りゴシック様式」であつた。1902年 (明治35年) 建設の黒島教会堂もマルマン神父が設計したものである。①煉瓦造りの大規模な教会堂であること、②中央祭壇が半円形平面であること、③奥行のあるトリフォリウムがあること、④列柱が重ね柱であることが特徴である。大工棟梁は大渡伊勢吉であつた。なお、建材の煉瓦は島の信者が自ら焼いたものに加えて、佐世保・有田方面から買い付けたものを労働奉仕で積み上げていったという。

3. ペルー神父

ペルー神父 (Albert-Charles-Arisène Pelu, 1848～1918, 正確にはプリュカ) は、1872年 (明治5年) にフランスを出て日本に向かった。1888年 (明治21年) に降下五島で司牧し、1895年 (明治28年) に旧井持浦教会堂を建て、5年後に日本で初めて「ルルドの泉」を創設した。その後、1908年 (明治41年) には堂崎教会堂を完成させた。堂崎教会堂の施工は福江の棟梁・野原与吉によるが、上五島の大工・鉄川与助が副棟梁を務めたと考えられている。この教会の特徴は、①煉瓦造りの壁にアメリカ積みを用いていること、②木造の小屋組みであること、③列柱には第2柱があるものの台座がない点で原初的であること、④重層屋根構成ではあるが、上層・下層の屋根の差が小さいことである。

4. フレノー神父

フレノー (Pierre-Théodore Fraineau, 1847～1911) 神父は1874年 (明治7年) に来崎し、長崎神学校長や上五島での布教活動をした他、旧浦上教会堂の設計にも関わった。この教会堂は、正面左右に鐘楼があり、第1柱は角柱で、4面に半円形の付柱があり、第2柱は長大で、第2柱頭はトリフォリウムの上端よりも高い。本教会堂の独自性はトランセプト (交差廊) があることである。なお、この教会堂は1945年8月9日に投下された原爆によって破壊されたが、被爆マリア像などが再建された浦上教会 (司教座聖堂) に残る。被爆煉瓦は上五島にある旧鯛ノ浦教会の鐘楼に再利用された。

5) ド・ロ神父の多様な事業については、長崎巡礼協議会 (2010) のブックレットを参照。出津文化村のド・ロ神父記念館 (旧出津鰯網工場) は必見である。

5. ラゲ神父, ガルニエ神父

その他に, フレノー神父のあとを継いで, 1914年(大正3年)旧浦上教会堂を完成させたラゲ神父(Émile Raguet, 1854~1929)や1933年(昭和8年)私財を投じて天草の大江天主堂を建設したガルニエ神父(Louis-Frédéric Garnier, 1860~1941)のことなども記憶されなければなるまい。

V. 日本人の棟梁建築家・鉄川与助

このように初期の教会建築は, 来日宣教師の指導と助言に負うところが大きい。しかし, そこに日本人棟梁が加わることによって, 西洋の教会建築と日本の伝統工法・技法の融合した教会建築が建てられたのである。その中心的役割を果たしたのが, 「棟梁建築家」とでも称すべき鉄川与助である。

1. 鉄川与助の生い立ち

鉄川与助は1879年(明治12年)に生まれ, 1976年(昭和51年)に97歳の生涯を終えた。上五島中通島, つまり南松浦郡新魚目町丸尾郷出身であり, 家業は代々大工棟梁, 父与四郎の長男であった。高等小学校卒業後, 家業を手伝い, 大工の修業に励んだ。興味深いことに, 与助は熱心な仏教徒(浄土真宗)であったが, 長崎県を中心に九州一円の50棟を超すカトリック教会建設に生涯を捧げた。言わば「両立型コミュニケーション」を実践した人物と言えるだろう。なお, 息子の与八郎, 孫の進は, 与助のあと鉄川工務店を引き継いだ。

2. 鉄川与助の教会建築

以下, 鉄川与助が設計・施工した教会群を年代順に列举しつつ, 若干解説を加えることにする。なお, 2012年3月8日から5月26日まで東京のLIXILギャラリーで行われた展覧会「鉄川与助の教会建築—五島列島を訪ねて」の図録(特に年譜)を主に参考にした。以下に出てくる「天主堂」とは, 中国語の「天主堂」に由来し, カトリックの教会堂を指す。

・1901年(明治34年)(22歳)

ペルー神父設計の旧曾根教会の建設を手伝ったことで, 教会建築に惹かれた。後に, 旧鯛ノ浦教会や旧桐教会の建築にも関わる。

・1906年(明治39年)(27歳)

4代目棟梁として家業を引き継ぎ, 鉄川組を立ち上げる。

以下, 新築工事に関わった教会を中心に据えて年譜を完成させていく。

・1907年(明治40年)(28歳)

冷水教会(長崎県新上五島町, 木造), 棟梁として初めて手掛けた教会堂。単層屋根構造, 瓦葺き, リブ・ヴォールト天井, 正面中央上部に八角の塔あり。中通島の奈摩湾を挟んで青砂ヶ浦教会と対峙する。



＜写真3 旧野首教会堂＞（2014年8月 橋内撮影）

・1908年（明治41年）（29歳）

野原与吉棟梁による堂崎天主堂（五島市奥浦町，煉瓦造り，長崎県指定有形文化財，現在はキリシタン資料館）の建設に関わる。

同年，旧野首教会（長崎県北松浦郡小値賀町，煉瓦造り，長崎県指定有形文化財）。煉瓦は堅固なイギリス積み，正面尖頭アーチ縦長額縁に「天主堂」の文字を刻む，屋根の両端に百合（フランス王家の紋章）の飾り，正面屋根上3か所に狭間胸壁，三廊式，リブ・ヴォールト天井，アカンサスの木製柱頭彫刻，側廊尖頭アーチにステンド・グラスあり。かつて野崎島の野首には17戸の復活キリシタンがいたが，キビナゴ漁を興し，それで得た収入を建設資金としたという。高度経済成長下で過疎化が進み，1971年には無人島と化し，教会としての役目を終えたが，いまなお旧野首集落のシンボルである⁶⁾。

同年，日本建築学会入会，機関誌『建築雑誌』を購読，東京で講習会がある度ごとに出席して研鑽に努めた。

・1910年（明治43年）（31歳）

青砂ヶ浦天主堂（長崎県南松浦郡新上五島町，煉瓦造り，国指定重要文化財）。50戸余りの信者が建設費を出し，煉瓦などの資材は信者たちが海岸から労働奉仕で運び上げた。同年，与助は柿原教会（長崎県五島市）の建設にも関わる。

・1911年（明治44年）（32歳）

6) 見学・拝観には，おちかアイランドツーリズム協会（TEL 0959-56-2646）に事前申込みを要す。小値賀港（笛吹港）から町営渡船「はまゆう」に乗船，35分で野崎港へ，そこから西へ徒歩20分。途中で鹿の群れに出会うこともある。管理人のいる野崎島自然学塾村での休憩または宿泊も可能。

佐賀教会（佐賀県，木造，現存しない）。この年，山田教会（長崎県平戸市生月町，煉瓦造り）も建設。この頃，ド・ロ神父（前述のⅣ. 1）と出会って，具体的な建築技術や教会堂設計思想などについて大いに学ぶところがあった。ド・ロ神父の設計，鉄川与助の施工により旧長崎大司教館の新築工事を着工，1915年に完成。

・ 1913年（大正2年）（34歳）

今村教会（福岡県三井郡太刀流町，煉瓦造り，双塔，半円アーチ，ロンバルト帯，福岡県指定有形文化財，国指定重要文化財）。同年，鉄川組事務所を長崎市に移転。

・ 1914年（大正3年）（35歳）

宮崎教会（宮崎県，木造，現存しない）。

・ 1916年（大正5年）（37歳）

大曾教会（長崎県南松浦郡新上五島町，煉瓦造り，長崎県有形指定文化財）。与助が初めて八角ドーム屋根の鐘塔を乗せた，煉瓦造り教会建築。なお，これ以前にあった旧教会は土井ノ浦教会（木造，上五島の若松島）に移築された。

・ 1917年（大正6年）（38歳）

旧大水教会（長崎県，木造，現存しない）。

・ 1918年（大正7年）（39歳）

田平天主堂（長崎県平戸市田平町，煉瓦造り，国指定重要文化財），与助が設計した最後の煉瓦造り教会。使われた石灰は信者が貝殻を焼いて作る。

江上天主堂（長崎県五島市奈留町，木造，国指定重要文化財）。木立の中に立つ重層屋根構成の瀟洒な教会。木造教会の最高傑作。信者が労働奉仕をし，漁で得た収入を建設費



＜写真4 江上天主堂＞（2014年8月 橋内撮影）

用に充てたが、本物のステンド・グラスは叶わず、透明なガラスに手描きで素朴な花模様を描いたという。後述のⅥ5参照。

・1919年（大正8年）（40歳）

頭ヶ島天主堂（長崎県南松浦郡新上五島町，石造，国指定重要文化財）。単層屋根構造，折り上げ天井（舟底天井），椿の花柄装飾を有す。外壁は粗石積み（ルスティカ），軒下にはロンバルト帯を巡らせている。石材（砂岩）は信者たちの懸命な労働奉仕で対岸のロクロ島から切り出し，舟に乗せて運び上げ，建設現場で石積みがされた。近接する崎浦地区の石工たちも協力した。1910年（明治43年）に始めたが，資金難のため2度中断し，完成までに10年を要した。工事終了後，全財産を使い果たして島を後にした者もいたという。



<写真5 頭ヶ島天主堂>（2014年7月 橋内撮影）

・1920年（大正9年）（41歳）

旧細石流教会（長崎県五島市久賀島，木造，現存しない）。

・1921年（大正10年）（42歳）

平蔵教会（長崎県，木造，現存しない）。

・1922年（大正11年）（43歳）

長崎神学校（長崎県長崎市，鉄筋コンクリート造り）。

・1925年（大正14年）（46歳）

長崎市にある旧浦上天主堂の双塔を竣工。

・1928年（昭和3年）（49歳）

手取教会（熊本県熊本市，鉄筋コンクリート造り）。

・1929年（昭和3年）（50歳）

大牟田教会（福岡県大牟田市，木造，現存しない）並びに紐差教会（長崎県平戸市紐差町，鉄筋コンクリート造り）。

・1930年（昭和5年）（51歳）

八幡教会（福岡県北九州市，木造，現存しない）並びに戸畑教会（福岡県北九州市，木造，現存しない）。

・1933年（昭和8年）（54歳）

大江教会（熊本県天草市，鉄筋コンクリート造り），新田原教会（福岡県行橋市，木造，現存しない），水俣教会（熊本県水俣市，木造，現存しない）の3件。

・1935年（昭和10年）（56歳）

崎津教会（熊本県天草市，木造・一部鉄筋コンクリート造り）並びに小倉教会（福岡県北九州市，木造・一部鉄筋コンクリート造り）。

・1938年（昭和13年）（59歳）

水ノ浦教会（長崎県五島市，木造）。海辺に佇む「貴婦人のような教会」と称えられる。

3. 晩年の鉄川与助

・1949年（昭和24年）（70歳）

鉄川組を鉄川工務店に改称。息子の与八郎が家督を継ぐ。

・1958年（昭和33年）（79歳）

建築功労者として長崎県知事より表彰される。鉄川工務店を株式会社化し，会長に就任。

・1959年（昭和34年）（80歳）

黄綬褒章を授与される。原爆で破壊された浦上天主堂の再建（浦上教会）を鉄川工務店の設計・施工で完成。

・1967年（昭和42年）（88歳）

勲五等瑞宝章を授与される。

・1976年（昭和51年）（97歳）

横浜にいた末子・喜一郎の家族に見守られながら，天寿を全うする。墓は生地丸尾郷にある。戒名は顕真院釈與樂居士。

以上の年譜から分かるとおり，教会建築家としての鉄川与助は明治・大正・昭和の長きにわたって活躍し，その数々の先駆的業績は長崎県と国によって高く評価されてきた。与助の設計・施工した教会堂の多くは，日本の近代建築史上大いに価値がある。特に田平天主堂・旧野首天主堂（野崎島の野首・舟森集落跡）・頭ヶ島天主堂・江上天主堂・崎津天主堂（天草の崎津集落）の5資産は，他の9資産とともに世界遺産に申請中の「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を形成している。

Ⅵ. 西洋の教会建築と日本の伝統工法・技法の融合

キリスト教の教会建築は、ヨーロッパで発展した建築様式であり、初期キリスト教（バジリカ・集中式、4世紀～7世紀）・ビザンティン（6世紀～15世紀）・ロマネスク（10世紀末～12世紀）・ゴシック（12世紀～15世紀）・ルネサンス（15世紀～16世紀）・バロック（16世紀～18世紀）・新古典主義（18世紀～19世紀前半）というような段階を踏んで変遷してきた。それに対して、長崎の初期教会群は19世紀後半に来日したフランス人神父の指導によって日本人棟梁が主体的に受容して造り上げたものである。ところで、19世紀前半のフランスではロマン主義が高まったが、建築上は19世紀半ばになると新古典主義から歴史主義に移った。その建築思想と郷里の教会堂イメージを携えて来崎した宣教師たちは、ネオ・ロマネスクまたはネオ・ゴシックの教会堂を建てようとしたと考えられる⁷⁾。当時の代表的な神父と棟梁の名は、すでに挙げたとおりであるが、以下は、西洋教会建築と日本の伝統工法・技法が見事に融合した教会群である。

1. 大浦天主堂

顧みるに、安政通商条約により長崎が開港されると、まず外国人居留地に教会堂が建てられた。その筆頭が1864年創建（木造）、1879年増改築（煉瓦造り・三廊式）の大浦天主堂（写真1）である。初代天主堂はフェレー神父とプチジャン神父の設計で、天草の大工・小山秀之進の施工である。現・大浦天主堂はそれを四方に広げて五廊式に増改築を行ったものである。浦上の溝口市蔵、伊王島の大渡伊勢吉、天草の丸山佐吉といった腕利きの大工棟梁が増改築工事を担当したのである（長崎文献社編 2005：14）。

長崎随一の有名な教会であるが、ゴシック風の大浦天主堂をつぶさに観察すると、いくつかの点で西洋の建築様式と日本の伝統技術の融合が認められる（川上 2008：18）。

- ①屋根は、日本の伝統家屋で一般的な切妻屋根（本を開いて伏せた形）である。
- ②外壁の煉瓦は漆喰で覆うことで、石造りに似せている。
- ③リブ・ヴォールト天井は、竹のしなりを漆喰で固めて曲面が形づくられている。西洋の教会では大抵、石を積み上げて造られるものである。
- ④主廊と側廊の列柱は石造でなく木造であり、植物模様の柱頭彫刻が施されている。
- ⑤ステンド・グラスは、鉛線に組み込むのではなく、カットされた色ガラスが木製の精巧なフレームにはめ込まれている。

大浦天主堂は、1933年と1953年の二度国宝に指定された。日本の教会建築史上初期のものでありながら完成度が高く、後から建てられた教会堂の目標とすべきモデルとなった。

7) フランスロマネスクについては、池田（2008）と中村・木俣（2004）を、フランスゴシックについては都築・木俣（2005）を参照。フランスの建築思想については、池田健二による「講座 五島列島カトリック教会探訪」（2015年4月10日、朝日カルチャーセンター中之島教室）が参考になった。

2. 旧五輪教会

久賀島の五輪漁港に二つの教会がある。港に近い方が旧五輪教会で、奥に新しい五輪教会が佇む。旧五輪教会は、1933年（昭和8年）に浜脇教会から移築したものであるが、その歴史は1881年（明治14年）まで遡る。外観はアーケード状の窓を除けば木造平屋の民家である。内部は三廊式の構成。リブ・ヴォールト天井は、漆喰を使わず板張りである。天井高は主廊部が高く側廊部は低い、立体感のある祈りの空間を形成する。大小3つの後陣は多角形を描く。設計・施工は不詳だが、司祭が教会堂を設計して、大工が伝統技術でゴシック風の空間を作ろうと努力したように見える。国の重要文化財。世界遺産に登録申請中の構成資産。



<写真6 旧五輪教会>（2014年8月 橋内撮影）

3. 江袋教会堂

江袋教会堂は単層屋根構成、木造、三廊式である。この教会は中通島北部の曾根郷にあり、背後の山地が海にそのまま落ち込む険しい傾斜地に建つ。民家風の身舎庇（もやひさし）構造（変形寄棟）で、奥行が浅く側廊の幅が広い。1882年（明治15年）に創建されたものであるが、2007年2月に焼損し、2010年見事に復旧修理されて原形が蘇った。江袋教会は、①初期教会堂建築の代表であり、②家御堂から本格的教会堂に移行する、その時代の独立した教会堂であって、③現役で最古の木造教会堂である点で、教会建築史上価値があるという。創建当時、フランス人ブレル神父の指導で日本人棟梁川原久米吉と17戸の信徒の総力で施工されたが、明治10年代には未知であった教会建築を日本の伝統工法・技法で施工したという点で特に注目される⁸⁾。

8) 江袋教会堂を含む上五島の教会群は、文化財修復の専門家である高橋弘一氏の案内で参観・見学した。江袋教会堂の歴史や建築上の特色については、『江袋教会堂焼損復旧工事報告書』（2010）を参照。

4. 出津教会堂・大野教会堂

出津教会堂と大野教会堂は、「陸の孤島」と言われた外海にあり、そこで献身的に司牧したド・ロ神父が設計・施工した。出津教会堂（写真2，1882年，明治15年完成）は，単層屋根構造，煉瓦造り，三廊式である。小高い山の南斜面にあり，神父の私財と信者の労働奉仕によって築かれた。材木は払い下げられた国有林から，煉瓦は唐津から搬入し，石は近くの山から掘り出し，他の資材は中古船を購入して長崎から運び込んだという。単層瓦屋根構造・煉瓦造りではあるが，屋内の列柱・貫・床はすべて木で造られた。列柱には信者たちが手描きした木目が見える。旧五輪教会同様，目下申請している世界遺産登録の構成資産。

大野教会堂（1893年，明治26年完成）は，出津教会の巡回教会として建てられた小さな教会堂である。これも神父の私財と信者の労働奉仕で造られた。列柱もない一室からなる単層屋根構造，木造・瓦葺き。地元で手に入る玄武岩を外壁に用い，半円のガラス窓が付く。和洋折衷の独特な建物である。国指定重要文化財。申請している世界遺産登録の構成資産。

5. 旧野首教会堂・江上天主堂など

ド・ロ神父や鉄川与助は，①大都会から遥かに離れた寒村に，②現地で入手し得る建材を使って，③小規模の教会堂を建てた。大野教会堂・冷水教会堂・頭ヶ島教会堂などは，そのような性格を共有する点で「日本のロマネスク」と称することができるだろう。既述の旧野首教会堂も江上教会堂も僻村に造られたものの，世界遺産登録に申請中の構成資産である。



＜写真7 リブ・ヴォールト天井（旧野首教会堂）＞（2014年8月 橋内撮影）

野崎島の丘に建つ旧野首教会堂は，単層屋根構造，煉瓦造り，三廊式ではあるものの，リブ・ヴォールト天井（写真7）のアーチ・主廊の列柱・聖堂全体の床はすべて木製である。

このような融合的な造りは、ヨーロッパの教会建築にはほとんど見られず、かの地で現存するものは石造建築が主である。因みにノルウェー、フィンランドやルーマニアなどの木造教会群（世界遺産）は全て材木から建てられている。建材の融合による教会建築工法は日本独特のものであり、伝統的な木造建築から煉瓦造り建築への移行段階にあると言えるだろう。

それに対して、奈留島大串郷にある江上天主堂（写真4）は、木造瓦葺の重層屋根で、高床であり、リブ・ヴォールト天井は漆喰で仕上げている。壁は下見張りで、軒下には持ち送りがある。内部はロマネスク建築を模したようで、三廊式を仕切るアーケードや天井のリブ・ヴォールトは半円のアーチを描く。主廊の立面は三層構成で、中間層には半円形アーケードによるトリフォリウムが設けられている。側廊の窓も半円アーチで構成されていて、統一感がある。本物のステンド・グラスは叶わず、窓は手で花柄が描かれている。

他にも、頭ヶ島教会・中ノ浦教会・半泊教会などを含む五島の教会群には、天井やステンド・グラスに椿の花柄模様が認められるが、この土地に根差した意匠であると考えられる。若松大浦教会のように民家を教会に転用した例もあり、愛らしい日本女性の顔立ちをしたマリア像（祭壇後方）が巡礼者を惹きつける。

Ⅶ. 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産化

1. 世界遺産としての価値

ところで、ユネスコのいう世界遺産とは、「顕著で普遍的な価値のある文化遺産や自然遺産」である。これを目下登録候補となっている「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」について価値づけるならば、つぎの3点を推薦の根拠として挙げることができる。

第1に、キリスト教信仰の普遍的価値とその日本の宗教史における独自性を文化遺産として評価し得る。

第2に、教会堂のもつ審美的・芸術的価値も評価されるべきである。

第3に、この地域の生んだ文化的景観も価値があり、世界遺産化に当たっては核心地域だけでなく緩衝地域の環境も保全すべきであろう⁹⁾。

第1点については、長崎におけるキリスト教徒（特にカトリック教徒）の辿った苦難と歓びを知れば、納得できるだろう。第2の点は、長崎県内各地に建てられた教会堂（長崎の大浦天主堂のみならず、平戸・外海と五島の教会群を含む）をつぶさに参観・見学すれば、建築美的な鑑賞に値するものが幾棟もあることに気づくだろう。最後の点は、教会堂の多くが離島や農漁村の復活キリシタン集落に造られたということに意義があり、周囲の環境を損なわない維持・管理が期待される。例えば、天草の崎津教会堂や久賀島の旧五輪教会は、静かな海辺の集落（漁村）があってこそその教会堂だろう。

9) この3点を「世界遺産の会」がアピールしている。松井（2013：93f）を参照。

2. 世界遺産の構成資産

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、16世紀以降日本にキリスト教が伝来・伝播、弾圧・潜伏、そして復活という過程を示す類まれな遺産群として世界遺産登録を目指している。世界文化遺産への登録申請遺産はつぎの14の構成資産からなる。そのうち、1から13までは、長崎県の西部海岸沿いと五島列島にあり、14は熊本県の西部に位置する天草にある。

—〈表1 構成資産一覧〉—

1. 大浦天主堂と関連施設（旧羅典神学校などを含む）（長崎の旧市内、南山手町）
2. 出津教会堂と関連遺跡（旧出津救助院を含む）（外海地方、長崎市西出津町）
3. 大野教会堂（外海地方、長崎市下大野町）
4. 日野江城跡（島原半島、南島原市）
5. 原城址（島原半島、南島原市）
6. 黒島天主堂（黒島、佐世保市黒島町）
7. 田平天主堂（平戸市田平町）
8. 平戸島の聖地と集落—春日集落と安満岳（平戸島、平戸市）
9. 平戸島の聖地と集落—中江ノ島（平戸島、平戸市）
10. 野崎島の野首・舟森集落跡（旧野首教会堂を含む、野崎島、小値賀町）
11. 頭ヶ島天主堂（頭ヶ島、新上五島町友住郷）
12. 旧五輪教会堂（久賀島、五島市蕨町）
13. 江上天主堂（奈留島、五島市奈留町）
14. 天草の崎津集落（崎津天主堂を含む、天草市河浦町）

このうち、8と9は2014年12月に、「平戸島の聖地と集落」が2つに分割されたもの。これら14の資産は、歴史的背景を基準におけば、つぎの3本柱からなる。

A. キリスト教の伝播と普及（キリスト教の信仰と弾圧を示す遺跡）

・日野江城跡、原城址

B. 禁教下の継承（禁教時代に形成された集落の内外にある、禁教時代から続く信仰の場、崇敬地など）

・平戸の聖地と集落

C. 解禁後の復帰（潜伏して信仰を守ってきた場所に信仰の証として建てられた教会群）

・出津教会堂、黒島天主堂、旧五輪教会堂、江上天主堂、頭ヶ島天主堂など

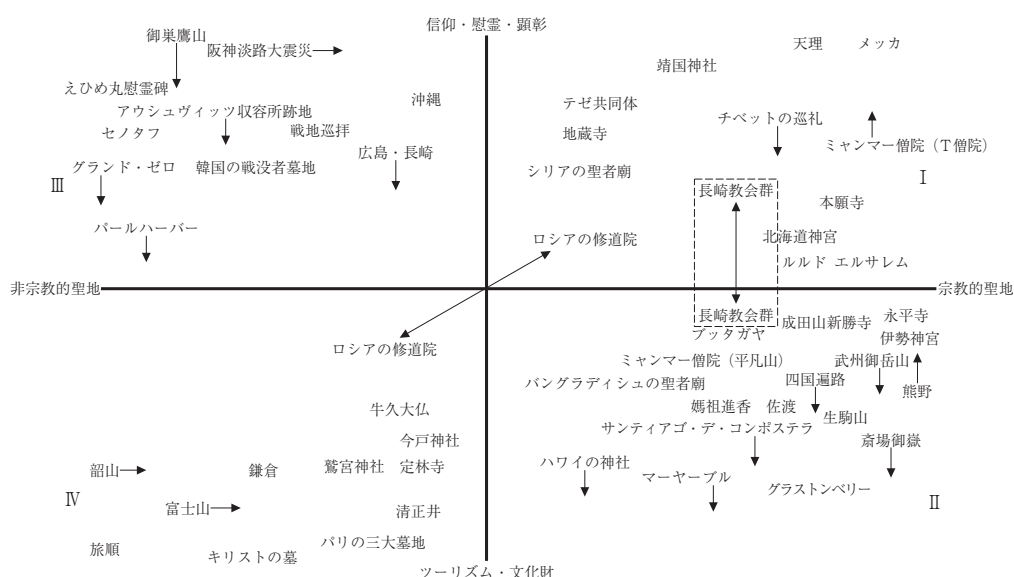
なお、日本二十六聖人殉教地、吉利支丹墓碑、宝亀教会、青砂ヶ浦天主堂、堂崎教会、大曾教会についても一体的に保存・継承するとしている。しかし、「長崎の教会群云々」というテーマを設定しながら、世界遺産化の推進過程で教会群が後ろに追いやられた感がある。その要因は、キリシタンの弾圧・潜伏時代を浮かび上がらせたからである。

さて、以上の構成資産のうち特に注目すべきは、鉄川与助設計・施工の旧野首教会堂・頭

ケ島天主堂・江上天主堂（以上五島列島）、田平天主堂（平戸）・崎津集落の崎津天主堂（天草）の5件である。さらに、申請登録資産と合わせて保存・継承されるべき青砂ヶ浦天主堂と大曾教会も鉄川与助の設計・施工したものであり、堂崎教会は彼が副棟梁として施工に関わった。こうしてみると、棟梁建築家・鉄川与助の教会建築に果たした役割の大きさは、実に瞠目に値するものである。

3. 聖地巡礼

前掲の日野江城跡と原城址は島原天草一揆の舞台であり、平戸の聖地は潜伏キリシタンが崇敬されてきた土地である。それらに対して、教会という聖地は地区の信者にとって「生きた信仰」の場である。巡礼ツーリズムで問題となるのは、管理の行き届かない教会堂である。信仰をもつ巡礼者にとっては「真正の聖地」であり、非信者の観光客にとっては「商品化された聖地」としての文化財である。この矛盾する二重性を考える上で、つぎの図3 現代聖地の動態類型にある「長崎教会群」（囲み線は橋内）は参考になるだろう。これが右上の象限と右下の象限に跨っていることに留意したい。長崎の教会群は、明らかに宗教的聖地である。その同じ聖地が、ホストである地区教会の信者にとっては日々の信仰の場であり、ゲストである観光客（観光客）にとっては「キリシタンという固有の歴史・文化に関わる体験が商品化」される場所である（松井 2013: 159～160）。彼らは文化財としての教会群を見学し、時間と空間を消費するのである。もっとも、同じゲストであっても、信仰心のある巡礼者にとっては、教会は神への祈りを奉げる場であり、癒しの空間であろう。中には、「巡礼観光客」と称すべき両者の中間的存在のゲストも来訪する。



＜図3 現代聖地の動態類型＞（星野・山本・岡本編 2012: 4～5）

4. 世界遺産化への歩み

「長崎の教会群」の世界遺産登録に向けての歩みは、つぎのとおりである¹⁰⁾。

2000年8月発行の三沢博昭・川上秀人『大いなる遺産 長崎の教会』(智書房)が契機。

2001年9月に「世界遺産の会」を設立。11月に「第1回長崎県世界遺産登録推進会議」を開催、以後長崎の教会群などの世界遺産化に向けた様々な活動を行う。

2007年1月に日本の世界遺産暫定リストに登録。

2012年1月の第3回推進会議では、29の構成資産を14に整理することが承認される。



＜写真8 「長崎の教会群を世界遺産に」というキャンペーン（上五島観光交通）＞
(2014年7月 橋内撮影)

2015年1月に政府が推薦書（正式版）をユネスコ世界遺産センターに提出。

2015年夏から秋頃 イコモス（国際記念物遺跡会議）による現地調査（予定）。

2016年4月か5月頃 イコモスによる評価結果の勧告（予定）。

2016年6月頃 第40回世界遺産委員会において審議（予定）。

日本の世界遺産（文化遺産）の中でこれまで宗教上の資産を含んでいたものは、北から南へ平泉・日光・富士山・京都・奈良・法隆寺・紀伊山地・巖島神社の8遺産であった。これらは神道・仏教または神仏習合の信仰に基づく歴史と文化の証を含んでいる。だが、2016年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が新たに登録されれば、日本としては初めてキリスト教（カトリック）の遺産が世界遺産に加わることになる。なお、今後世界遺産暫定リスト登録が考えられる文化遺産には、八十八ヶ所巡礼の「四国遍路」があるだろう¹¹⁾。

10) 主に長崎県の公式ホームページを参照。https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/heritage/

11) 森（2014）を参照。2010年に四国八十八箇所霊場と遍路道 世界遺産登録推進協議会が結成された。

Ⅷ. 世界遺産化とツーリズムの諸問題

1. 場所の商品化一点から面へ

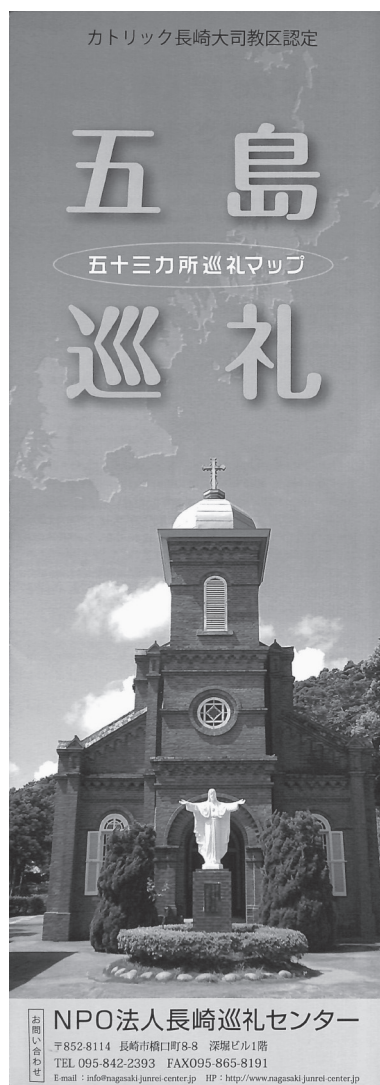
2007年以来長崎県はその教会群等をユネスコの世界遺産に登録すべく力を入れてきた。それまで、教会堂と言えば、浦上天主堂のみが国宝であり、この1点がキリスト教観光の目玉であった。それが長崎県西部と五島列島の教会群等が世界遺産化すれば、点から面へ「場所の商品化」が進むことになるのである（松井 2013）。つまり、長崎市はさておき、県の半島部や島嶼部は深刻な人口減少地域であり、世界遺産化は地域経済の活性化に役立つだけでなく、地域住民のポジティブなアイデンティティ形成に寄与すると考えられている。

2. 五島巡礼

カトリックの長崎大司教のお墨付きで NPO 法人・ながさき巡礼センターが組織化され、これが主体となって、四国巡礼に見立てた「ながさき巡礼」を企画した。サンチャゴ巡礼を参考にして『五島巡礼手帳』（巡礼スタンプ・ブック）が編まれ、各地に点在する52（+2）の教会と若松キリシタン洞窟を繋いだのである（岡本 2015：16）。巡礼センターからは『五島巡礼五十カ所巡礼マップ』も発行されているが、表紙の写真は大曾教会堂（鉄川与助設計・施工）である。

カトリックの信者であるか否かを問わず、教会は宗教的な癒しの空間を提供する。訪問者は、個々の教会建築について学んだり、それぞれの教会を支えてきた地域のキリスト教史（宣教・殉教・潜伏・復活）に思いを馳せたりすることができる。教会堂の立地する自然環境（離島、海辺、平地、山地など）や文化的景観（都会、農村、山村、漁村のキリシタン集落）に惹かれることもあるだろう。その意味で、巡礼ガイドの養成と役割も重要である。

五島列島は、小値賀島・野崎島（北松浦郡小値賀町）、頭ヶ島・中通島・若松島・有福島（南松浦郡新上五島町）、奈留島・久賀島・福江島・嵯峨島（五島市）などからなるが、本土との交通は、主に長崎・佐世保・博多との航路に依存している。空路は福岡と五島福江の間に1日4往復、長崎と五島福江の間に1日3往復



<写真9 五島巡礼マップ>

の便がある。小値賀空港は休港中、頭ヶ島の上五島空港は閉鎖中である。架橋されてない島から島への移動はフェリーか海上タクシーに頼らざるを得ない。島内の移動は、運行回数の少ないバスかタクシー、あるいはレンタカー（電気自動車）または徒歩である。そのような交通事情の中での教会巡りは結構、難儀である。それに、教会の多くは交通の便の良い港町や街中にはなく、辺鄙な山奥や岬の突端にあるので、巡礼者は難路を厭わずにひたすら歩く覚悟が必要である。とりわけ、江上教会や旧五輪教会、それに半泊教会や赤波江教会などは至極不便な地にある。

その中であって、2014年6月から五島バスが「五島列島キリシタンクルーズ」の運行を始めたのは、ありがたいことである。これは、うどんの里（有川）発の送迎バスが青方バスセンターまで来て若松港から乗船、若松島のキリシタン洞窟・奈留島の江上教会・久賀島の旧五輪教会を巡って福江港に至る、定期便（土日祝1日1往復）である。だが、潜伏キリシタンが五島崩れの迫害を避けて身を隠していた、キリシタン洞窟には上陸できない。

他方、上五島では、鉄川与助の設計・施工による頭ヶ島教会・冷水教会・青砂ヶ浦教会がよく紹介されるが、巡礼先には曾根郷の江袋教会（既述）を是非加えたい。与助の作品ではないが、初期教会堂建築の代表であり、現役で最古の木造教会である。民家風の独特な建築様式は、訪問者に忘れ難いものとなるだろう。

「訪島に適切な時期はいつか」という問いに対しては、台風の襲来する時期を避け、秋から暮れにかけてのイベントに参加することを推奨する。例えば、

- ①10月に新上五島町主催「ウォーク&クルーズ」という島内観光イベントが開かれる。
- ②12月中旬の待降節。上五島の教会堂は電飾で輝き、複数の教会でチャーチコンサートが開かれる。コンサートには、長崎県内外の音楽家も招かれて演奏する。

3. 世界遺産化に向けての問題点と改善策

巡礼者はさておき、観光業者が企画するパッケージツアーによるツーリスト（観光客）の増加は、すでに登録された世界遺産で起きているように、いくつかの不安材料が含まれる（松井 2013：85）。以下の丸括弧内に述べることは、橋内による補足である。

- ①（心ない）観光客による文化財の破壊・汚損といった被害が出る。（基本的マナーの欠如だけでなく、盗難すら懸念される。教会によっては、拝観日や拝観時間以外は施錠する。）
- ②過剰な観光客が押し寄せることによって地域の生活環境が悪化する。（ゴミの放置、トイレ不足によるし尿処理問題、生活道路の交通渋滞、深夜の騒音、犯罪の増加が予想される。）
- ③観光地化が進むことにより、自然環境や文化的景観が損なわれる。（例えば、大型ホテルの建設、土産物商店街の形成、自販機の設置、巨大屋外広告は、環境保護の点から問題である。）
- ④前項の結果として、世界遺産としての価値が失われる。（では、何のための世界遺産か。審美的・文化的景観をひどく損なえば、一旦認められた世界遺産登録を取り消されかねない。）

⑤世界遺産登録直後の、一時的な観光ブームに終わりがねない。(つまり、当該地域の持続的発展に寄与しない。)

既存の世界遺産を見回すと、2013年登録の「富士山」は、環境保全のために入山料を徴集している。1993年登録の「屋久島」でも清掃協力金を改め、すべての観光客から入山料を徴集し始めるようである。地方自治体の財政は厳しいし、高齢化した社会の地域ボランティアに清掃などの環境保全の任を委ねるのにも限界があるだろう。外国の例としては、ネパールのカトマンズ¹²⁾やイタリアのシエナなどが挙げられる。それらの市街地（世界文化遺産）に入る場合には、入域料または観光税を払わなければならない。今後「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」に多数の観光客が押し寄せる事態になれば、入域料の徴収も検討課題になるだろう。

実際問題、世界遺産化によって五島などに増える訪島者を迎え入れる体制がどの程度確立しているか疑問である。僭越ながら、五島市・新上五島町・小値賀町が一体となった観光・運輸・文化行政が進められることが期待される。そして、島内各地への交通網の拡充・定期観光バスの開設・合乗りシャトルタクシーの開業、中通島北魚目地区と野崎島・小値賀島間の定期渡船運行、五島巡礼と重要文化的景観の巡検を組合せたツアーの企画推奨、全島各地区における宿泊施設（特に民宿・民泊）と公衆トイレの拡充、外国人旅行者向きの多言語表示・多言語パンフレットの作成と通訳ガイドの育成が急務であろう。

4. 関係三者の役割—ゲスト・ホスト・プロデューサー

改めて言うまでもなく、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、独自の地域史を背負っている。松井（2013：86～87）も述べているように、その世界遺産化推進には、つぎの三者が関わっており、

- ① ゲストとしての巡礼者・ツーリスト（観光客）、
- ② ホストとしてのカトリック教会・聖職者・信者・地域住民、
- ③ プロデューサーとしての地方自治体・観光関連業者・有識者・NPO ほか任意団体・メディア・教育関係者などが欠かせない。

とりわけ、③の果たす役割は重要であり、世界遺産登録後も当該地域の健全な持続的発展のために寄与することが期待される。総じて、世界遺産への登録は、地域にとってプラスにもマイナスにも作用し、光と影の両面があることを十分認識しておくべきだろう。

IX. まとめと結論

長崎県は九州の最西端にあって、半島部と島嶼部からなり、東シナ海に面している。そのため、様々な分野で対外交流が盛んであった。キリスト教（特にカトリック）もその一つで

12) 但し、2015年4月15日以前のことである。この日にカトマンズを襲った大地震のため、貴重な構成資産であるダラハラの塔が崩壊、寺院・史的建造物なども修復困難な損傷を受けた。

ある。本稿では、宣教・弾圧・潜伏・復活という長崎のカトリック史を振り返り、長崎（特に五島）の教会群が成立した歴史的背景を踏まえつつ、それらの教会建築の特色を明らかにした。その際、フランス人宣教師ド・ロ神父などと日本人棟梁・鉄川与助の果たした役割と両者の交流が重要であることを示した。

その上で、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がユネスコの世界遺産に登録された場合に起き得る問題点をツーリズムの観点から指摘し、若干の提言を行った。五島列島の集落は、少子高齢化と転出により人口が希薄であり、長崎県随一の過疎地である。それゆえ、五島の教会群を世界遺産化することは、この地域の活性化に役立つだろうが、同時にその貴重な自然環境と文化的景観の悪化を招きかねない。地域の持続的発展のために、今後検討・解決すべき課題が多いことを強調しておきたい。

引用・参考文献

- 池田健二（2008）『フランス・ロマネスクの旅』，中央公論新社。
- 池田健二（2015）「上五島のカトリック教会を巡る」（配布資料），講座・五島列島カトリック教会探訪，4月10日，朝日カルチャーセンター中之島教室。
- 浦川和三郎（1973）『五島キリシタン史』，国書刊行会。
- NHK「美の壺」制作班編（2008）『長崎の教会』，NHK 出版。
- NPO 法人長崎巡礼センター（N.D.）『五島巡礼一五十三カ所巡礼マップ』，長崎巡礼センター。
- NPO 法人長崎巡礼センター（2011）『ながさき巡礼 長崎県の教会堂』，長崎巡礼センター。
- 江袋教会復旧委員会専門委員会（2010）『江袋教会堂焼損復旧修理工事報告書』，宗教法人カトリック長崎大司教区。
- 大橋幸泰（2008）『検証 島原天草一揆』，吉川弘文館。
- 大橋幸泰（2014）『潜伏キリシタン—江戸時代の禁教政策と民衆』，講談社。
- 岡本亮輔（2015）『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで』，中央公論新社。
- オフィス・ノンブル編（2010）『外海のキリシタンとド・ロ神父』，長崎巡礼協議会。
- 海上保安庁（1987）『海上保安の現況 昭和62年』，海上保安庁。
- 川上秀人（2010）「長崎地方における江袋教会堂」，『地袋教会堂焼損復旧修理工事報告書2010』，宗教法人カトリック長崎大司教区，pp. 25～33。
- 片岡弥吉（1967）『かくれキリシタン』，日本放送出版協会。
- 片岡弥吉（2010）『日本キリシタン殉教史』，智書房。
- 木村勝彦（2007）「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」，『長崎国際大学論叢』7号，pp. 123～133。
- クリュックシャンク，ダン編・飯田喜四郎監訳（2012）『フレッチャー図説 世界建築の歴史大事典—建築・美術・デザインの変遷—』，西村書店。
- 五野井隆史（2012）『キリシタンの文化』，吉川弘文館。
- 雑賀雄二（2011）『天主堂 光の建築』，淡交社。
- 住友和子編集室（2012）『鉄川与助の教会建築—五島列島を訪ねて』，LIXIL 出版。
- 高橋弘一郎（2013）『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで』，岩波書店。
- 地球の歩き方編集室（2015）『地球の歩き方 JAPAN 島旅01 五島列島』，ダイヤモンド・ビッグ社。
- 都築響一・木俣元一（2005）『フランス ゴシックを仰ぐ旅』，新潮社。
- Toyama (Kanamoto) Itsuko (2014) Dual Funeral Services: Compatibility and Consistency in the Dual

- Religions of Japan's *Kakure Kirishitan*, 『桃山学院大学総合研究所紀要』, 第40巻第1号, pp. 147~153.
- 遠山淳 (2011) 「五島・長崎をめぐる異文化交流のトポグラフィー——鎮国史観からグローバル・ヒストリーの視点へ——序論にかえて」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』 第37巻第1号, pp. 109~122.
- 中村好文・木俣元一 (2004) 『フランス ロマネスクを巡る旅』, 新潮社.
- 長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修 (2005) 『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』, 長崎文献社.
- 長崎文献社編 (2007) 『旅する長崎学 6 キリシタン文化 別冊 総集編 キリシタン文化の旅 長崎へのいざない』, 長崎文献社.
- 長崎文献社編 (2010) 『旅する長崎学 14 海の道Ⅳ平戸・松浦 西の都への道』, 長崎文献社.
- 長崎文献社編 (2011) 『旅する長崎学 15 海の道Ⅴ島ガイド 島々への道』, 長崎文献社.
- 久賀島近代キリスト教墓碑調査団編 (2007) 『復活の島——五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書』, 長崎文献社.
- 星野英紀・山中弘・岡本亮輔編 (2012) 『聖地巡礼ツーリズム』, 弘文堂.
- 増田寛也・日本創成会議 (2014) 「消滅可能性都市896全リストの衝撃—523は人口1万人以下」, 『中央公論』 6月号, pp. 32~43.
- 松井圭介 (2013) 『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化』, 筑波大学出版会.
- 松田毅一 (1980) 『南蛮のバテレン 東西交渉史の問題をさぐる』, NHK ブックス.
- 三沢博昭・川上秀人 (2000) 『大いなる遺産 長崎の教会』, 智書房.
- 三宅享 (2012) 「倭寇と王直」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』, 第37巻第3号, pp. 173~194.
- 宮崎賢太郎 (2001) 『カクレキリシタン オラショ—魂の通奏低音』, 長崎新聞社.
- 宮崎賢太郎 (2014) 『カクレキリシタンの実像』, 吉川弘文館.
- 森正人 (2014) 『四国遍路 八八ヶ所巡礼の歴史と文化』, 中央公論新社.
- 山中弘編 (2012) 『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』, 世界思想社.

URL

- https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/heritage/ 2015.02.25検索
- <http://www1.odn.ne.jp/tetsukawa/heritage.html> 2015.02.25検索
- http://oratio.jp/p_resource/kyunobuki-church 2015.02.25検索
- <http://official.shinkamigoto.net/worldheritage.php> 2015.03.30検索

(2015年3月31日受理)

Catholic Churches in Nagasaki: Their Heritage and Tourism

HASHIUCHI Takeshi

Based on extensive field work and critical literature review, this paper examines four and a half centuries of Catholic heritage in Nagasaki with its distinctive churches built in its countryside since the late nineteenth century. These buildings are now our focus of attention because of their application as UNESCO World Heritage Sites, which will naturally lead to becoming attractive spots for tourists in the future.

With its Catholic heritage, Nagasaki Prefecture has as many as 137 churches throughout its peninsulas and islands, 13% of the 1,006 churches in Japan. You might wonder why this is. Actually, Christianity was first introduced by St. Francisco Xavier in 1549, and missionaries active mainly in Nagasaki and neighboring areas in the latter half of the 16th century. However, in 1614, the Tokugawa shogunate banned the religion. As a result, many Christians went underground, with some nominally converted to Buddhism without losing their Catholic faith, thus having dual funeral services. They were *kakure kirishitans* (Christians) hiding themselves from the mainstream of the local communities. They lived mostly in the Nagasaki area including Nagasaki, Urakami, Sotome, Hirado, Ikitsuki, and the Goto archipelago. Later, their practice became a form of folk religion.

After gaining freedom of religion in 1873, many *kirishitans* came out with their firm faith, and began building churches in their communities. They were usually planned by the French priests in collaboration with Japanese architects, and assisted by a workforce of local Catholic followers. In this respect, such names as Father Marc-Marie de Rotz (1840~1914) and Yosuke Tetsukawa (1879~1976) are notable and worth remembering. The churches' styles and building techniques were blend of French Neo-Romanesque or Neo-Gothic with traditional Japanese architecture. The materials used evolved in three stages: wooden, brick/stone, and reinforced concrete. These churches often include such elements as ribbed vaults, carved capitals with acanthus-leaf decoration, floral stained glass, Lombard bands, and bell towers.

With this rich Catholic tradition, Nagasaki's churches and related monuments such as *kirishitan* sanctuaries and castle ruins are recommended as the World Heritage Sites for the year 2016. On the proposed list of Cultural Heritage locations are five of some fifty churches built by Tetsukawa: Former Nokubi Church, Kashiragashima Church, Egami Church, Tabira Church, and Sakitsu Church. The local Catholic communities would certainly feel much to pride for their faith and heritage. Nevertheless, the increasing number of pilgrims and tourists to the peninsulas and islands, particularly the Goto archipelago, might create many challenging issues that need to be resolved: maintaining church architecture and other related monuments, improving marine and

land transportation systems, and preparing enough accommodations and public facilities to meet the expected increased demand of visitors.

Finally, let me note that this research work is supported by the Kyodo Kenkyu Project at Momoyama Gakuin University for the period April 2011 to March 2014. The title of the project is ‘Topography of Nagasaki in the Japanese History of Intercultural Adaptation and Exchange: From a New Perspective of Global History’.